様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：２３８０４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８２３

研究課題名（和文）インドネシアにおける大正琴の伝播と受容に関する民族音楽学的研究

研究課題名（英文）Ethnomusicological Study of diffusion and acceptance of Taisho-koto in Indonesia

研究代表者
梅田　英春（Umeda, Hideharu）

静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授

研究者番号：４０３１６２０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　大正琴は、1912年（大正元年）に、名古屋在住の森田吾郎（1874-1952）により創案、製作された鍵盤付弦楽器である。この楽器は、1915年頃から1940年頃まで、東アジア、南アジア、東南アジアへと広く輸出された。アジアに伝播した大正琴は、その後、それぞれの地域で変容をとげ、各地の音楽の中に取り込まれ、現在まで用いられている。本研究では、戦前の日本から大正琴が輸出された状況、その社会的要因、またその楽器の特徴を明らかに、その楽器のインドネシアへ伝播について概観した。

研究成果の概要（英文）：A Taisho-goto is a stringed zither, that is plucked using keys, and was invented in Nagoya in 1912 by Morita Goro (1874－1952). The musical instrument quickly gained popularity in Japan and, from approximately 1915 unti 1940, it was exported to East Asia, South Asia and Southeast Asia. Some of the Taisho-goto that arrived in Asia, were remodeled according to local preferences and accepted as local instruments. The purpose of this research is to describe the situation that facilitated the export of Taisho-goto and the social factors this export created, features of the musical instrument that made it suitable for the export and its spread to Indonesia.

研究分野：民族音楽学

キーワード：インドネシア　バリ島　大正琴　伝播　受容

１．研究開始当初の背景

（１）大正琴の輸出

1913 年（大正元年）に日本で誕生した創作洋楽器である大正琴は戦前、早くから東南アジア、南アジアに輸出されてきたことは、これまでの研究の中で明らかにされてきた。しかし、その一方で、その理由や輸出の規模、その社会的背景、また輸出されていった楽器については明らかにされてこなかった。

（２）インドネシアへの伝播

インドでの受容については若干の研究があり、また現在ではインドに受容した大正琴は変容して、インド楽器として伝統音楽を演奏するための大きな役割を担っている。しかし、インドネシアについては、その利用が限定されているため、輸出の背景について明らかにされてこなかった。

上記の二点が研究開始時の状況であり、この問題を明らかにするため、これまで行われていなかった海外向け大正琴の研究を、挑戦的萌芽研究として取り組むこととした。

２．研究の目的

本研究は、1913 年（大正元年）に日本で創作され、現在も日本各地で演奏されている大正琴のアジア各地への輸出の状況、また特にインドネシアにおける楽器の伝播、変容のメカニズム、またインドネシアでの演奏の現状を明らかにするものである。

３．研究の方法

日本からの輸出に関しては、大正琴の輸出に関わる貿易資料、当時の大正琴製作者の組合の資料、また海外向け楽器の現物や附属資料の文献調査を行った。また海外の伝播の事例として、インドネシアに伝播した大正琴をとりあげ、特にバリ島東部と西部の二カ所で伝承しているそれぞれの楽器、その楽器を用いたアンサンブル、また受容の過程などの歴史的調査を、現地でのフィールドワークを通して実施した。

４．研究成果

研究成果は以下の 2 点である。

（１）海外への輸出に関する研究成果

貿易関係の統計資料によると、大正琴は戦前期に限ると、1915 年（大正 3）年頃からアジア方面への輸出が始まり、その後、1940 年（昭和 15 年）まで続いている。名古屋市の資料によれば大正中期には、「中国その他海外へも盛んに輸出されるようになった。その単調な金属音響は熱帯土人の趣味に合し、南洋・印度から盛んに需要せられた」とある。

しかし実際のところ、大正琴の輸出のデータを当時の統計から明らかにするのは難しい。なぜなら大正琴は、楽器ではなく玩具に分類されていたからである。大正琴誕生の当時、日本の玩具の海外輸出額は突出するようなものではなかったが、第一次大戦勃発後、玩具大国であったドイツ、オーストリアからの輸出が極端に減少したことで日本の玩具の輸出額は、漁夫の利を得て第一次世界大戦の間に 4 倍にも増加した。その玩具の中に大正琴も含まれていたのである。

大戦終了後、ヨーロッパの復興によって日本全体の輸出貿易の総額は減少していったため、政府は、品質向上や企業間の協力体制を強化するために、大正 14 年に輸出組合法と重要輸出品工業組合法を制定した。特に後者は玩具や楽器を含む重要輸出品を定め、中小企業を保護するカルテル協定でもあった。こうした社会的背景の中で昭和 2 年に設立されたのが、名古屋輸出楽器玩具工業組合である。この組合は、設立目的や定款によれば、大正琴を製作する中小企業のみを対象とした組織であることがわかる。以下が組合の設立理由である。

「本組合の設立の目的は次の如きものである、すなわち、近来名古屋市における楽器玩具工業の発達は頗る顕著なものがあり、その年産額は数十万円に達し、しかもその八割はこれを輸出しており、需要も益々増加しようとしつつあるにも拘らず、これ等業者が薄資微力なる小工業者であることと、且業者間に何等の連繋を有しないため激烈な価格競争が行われ、従って価格の低下を来し生産を持続することが出来ないようにまでなって来ている、しかのみならず[ママ]その品質は粗悪となり今後の新販路開拓によってその発達を期待さるべきはずであるにもかかわらず、憂慮すべき状態に陥らんとしつつあり…（後略）。」（『中外商業新報』 1930 年 5 月 29 日）

ここから読み取れることは、大正琴を製作する業者間の連携がないことから、価格競争が起こり、粗悪な製品がみられ、そのことが今後の輸出に影響を与えることを憂慮していることがわかる。またこの楽器の海外での可能性を次のように記述している。

「この楽器玩具は文化の程度が低いものの間に多く需要せられるの傾向を有するもので、且その単調なる金属性の音調は既に南洋向で、この種楽器を特に愛好する同地方の需要は内地におけるが如く一時的流行物であったものとは異るものがあろうし今後需要地に対する宣伝、使用方法の普及、楽譜の完備を期すると共に更に研究改良をすればその発達は相当期待し得べきものがあろうと思われる…（後略）」（（『中外商業新報』 1930 年 5 月.29 日）。

「文化の程度が低いものの間に多く需要」、「単調なる金属性の恩寵は南洋向」という表現は南洋文化に対する差別的表現といえるが、これらは当時の日本における南洋文化に対する文化観の反映ともいえよう。すでに大正琴の流行が廃れかけた日本とは異なり、研究、改良を重ねることにより海外での需要が見込まれる可能性について上記の引用は言及している。

これまで全くその活動の内容がわからな

かった名古屋輸出楽器玩具工業組合に焦点を当てたことは、この研究の大きな研究成果であり、この組合の活動によって、粗悪な大正琴の輸出に規制がかかり、大正琴の品質が向上し、製品が管理されたことで、名実ともに玩具から楽器へと姿を変えて大正琴が輸出されていったといえよう。

（２）インドネシアへの伝播
大正琴の輸出先の一つにインドネシア（蘭領印度）が含まれていたことは、戦前の文献から明らかである。しかし、ほとんどの文献には、輸出先国が明記されておらず、南方、南洋と記されているだけで、具体的にそこがどの場所なのかが明らかではない。戦後の文献の中に、「タイ、マレー、ジャワ、スマトラ大正琴がどんどん出ていったのである。」とあり、具体的にジャワ島、スマトラ島をあげている。

大正琴が名古屋港だけから輸出されたとは断定できないが、1928 年（昭和 3 年）には、は名古屋港から月 2 回、大阪商船による南洋線（南洋諸島を寄稿し、終着港はスラバヤ）、月 4 回、ジャバ・チャイナ・ジャパン汽船によるジャワ線（スマラン、ジャカルタを経由し終着港はスラバヤ）が運航している。また 1932 年（昭和 7 年）には、これまでの二航路に加えて、石原産業海運や南洋郵船が南洋線、ジャワ線を運航させているために、インドネシアには毎月かなりの本数の船が運航していたことになる。
インドネシアに直接輸出する場合はこの航路を使ったことは間違いないが、実際のところ、いつ、どのように大正琴がインドネシアに輸出され、受容されていったのかを日本側の資料から明らかにすることはできなかった。

本研究では大正琴を起源とする楽器が用いられているバリ島の二つの地域（バリ東部、カランガッスム県、バリ西部タバナン県）の事例を調査した。なお東部ではこの楽器はプンティン penting とよばれ、西部ではマノリン manolin またはマンドリン mandolin とよばれている。

東部、西部両地域にける演奏者へのインタヴューによれば、彼らはこの楽器の起源を日本とは全く認識しておらず、特に東部地域では、中国の行商人が村に持ち込んだと伝えられており、その楽器を演奏する際の舞台装飾も中華系の装飾を意識したものとなっていた。また西部については、バリ人のみならず、ロンボック島などから移住してきたイスラムの人々の楽器として用いられることも多い。このことは、楽器がイスラム圏からバリに持ち込まれた可能性も考えられよう。どちらにしても日本で創作された大正琴は、楽器として日本人とは限らない行商人や宗教、人の移動とともにバリ島に伝播したといえるだろう。

両地域においては、アンサンブルで演奏され、それぞれの編成はガムラン・ノリン gamelan nolin（西部の名称）、ガムラン・プンティン gamelan penting（東部の名称）とよばれている。また東部では、1 台のみで、歌唱の伴奏、イスラム系の音楽の旋律楽器として演奏されている。

現在では、バリ島東部、西部ともにその地域を代表する楽器として、地域の人々はその楽器に強い地域的なアイデンティティを感じることができる楽器となっている。昨年度の調査では、バリの西部地域から発信されるポップミュージックのグループが大正琴を起源とする楽器を複数台使うなどの新たな展開が行われていることが明らかになった。このように本研究を通して、日本で誕生した大正琴は、インドネシアに伝播した後も、楽器の変容が続き、現在もなお新しい音楽の中に取り込まれていることが明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
<u>梅田英春</u>、戦前の日本における大正琴の輸出とそのインドネシアへの伝播、静岡文化芸術大学研究紀要、査読無、第 17 号、2016、57－64

〔学会発表〕（計　１　件）
<u>梅田英春</u>、戦前の大正琴の輸出に関する一考察――名古屋輸出玩具工業組合の設立とその役割、東洋音楽学会第 68 回大会（沖縄県立芸術大学、2017 年 11 月 12 日

〔図書〕（計　１　件）
<u>梅田英春</u>、浜松市、バリ島のガムラン、浜松市楽器博物館総合案内図録、93－96
〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
梅田　英春（UMEDA, Hideharu）
静岡文化芸術大学　文化政策学部　教授
　研究者番号：４０３１６２０３

(2)研究分担者
(　　)

　研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

　研究者番号：

(4)研究協力者
鈴木　良枝（SUZUKI Yoshie ）